

〔資料紹介〕

鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題

新名主 健 一

(一九八七年十月十四日 受理)

I

一、単行本・雑誌

- 1、「日本の方言」柴田武 岩波新書 一九五八
- 2、「実践国語」第十五卷第一六五号 穂波出版社 一九五四
- 3、「言語指導」上甲幹一 朝倉書店 昭和三十二年
- 4、「方言学講座 第四卷」東京堂 昭和三十六年
- 5、「吉嶺勉先生遺稿集」吉嶺勉先生遺稿集刊行会・昭和五十七年

二、研究冊子

- 1、「標準語指導と新教育」川尻中学校 昭和二十九年
- 2、「はなしことば」春山小学校 昭和二十九年
- 3、「はなしことば特設指導計画」徳光小学校 昭和二十九年
- 4、「共通語指導と学習効果」徳光小学校 昭和三十年
- 5、「共通語指導の実際」川尻小学校 昭和三十二年
- 6、「話しことば指導研究会」鹿児島県国語教育研究会・喜入町教育委員会 昭和三十四年
- 7、「話言葉カリキュラム(四月～七月)」喜入町 前之浜小学校 昭和三十四年

新名主：鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題

三、テキスト

- 8、「話言葉カリキュラム(九月～三月)」喜入町 前之浜小学校 昭和三十四年
 - 9、「話しことば指導の歩み」^{注一}船津小 昭和三十二年
 - 10、「^{注二}はなし指導書」^{注一}贈吟郡大崎町大丸小学校 昭和三十六年度
 - 11、「昭和三十六年度^{研究}話しことば指導の歩み」大崎町大丸小学校 昭和三十六年度^{記録}
- 秋田標準語教育委員会編
秋田県国語教育研究会編
- 1、「話言葉改善指導書」鹿児島県話言葉改善委員会 昭和十八年
 - 2、「^{注二}話言葉改善指導書」昭和十九年五月
 - 3、「ことばのほん」徳光小学校 昭和二十一年
 - 4、「ことばの本」指導書
 - 5、「ことばのほん 小学校低学年用」鹿児島県国語教育研究会
 - 6、「ことばのほん 小学校高学年用」鹿児島県教育委員会 昭和三十一年

鹿児島県国語教育研究会

鹿児島県教育委員会 昭和三十一年

- 7、「ことばのほん」 鹿児島県国語教育研究会・鹿児島県教育委員会
昭和三十三年

- 8、「ことばの本 指導書」 鹿児島県国語教育研究会・鹿児島県教育
委員会 昭和三十三年

- 9、「はなしことばの本」 鹿児島市八幡小学校編 昭和三十三年

- 10、「話言葉改善指導書」 鹿児島県話言葉改善委員会 八幡小学校
増冊

- 11、「話しことば」テキスト 甑島地区広報協議会 昭和三十四年

四、実践記録および配布資料（西村義雄氏所有——開聞町川尻在）

- 1、「話し言葉」^{注三} 西村義雄 昭和二十九年 徳光中

- 2、「ことば指導」西村義雄 昭和二十九年〜昭和三十三年 徳光中

- 3、「ことば関係資料」 西村義雄 昭和三十三年 東郷小

- 4、「ことば」 西村義雄 昭和三十四年 上甑中

- 5、「ことば」 西村義雄 昭和四十一年

五、共通語指導をとり上げた雑誌

- 1、「鹿児島^{注四} 国語教育 第六号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二
十八年五月

- 2、「国語通信 第八号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二十九年

- 3、「国語通信 No.9」 鹿児島県国語教育研究会 昭和二十九年

- 4、「国語通信 10」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十年

- 5、「国語通信 No.14」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十三年

- 6、「鹿児島 国語教育 第六号 特集共通語指導」 鹿児島県国語教
育研究会 昭和三十三年六月

- 7、「国語通信 第二十一号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十三年

年

- 8、「国語通信 第25号」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十七年

六 論文その他

- 1、「標準語研究を終りて」 床次國治 「コトバ」^{補注一}第五卷第三號 昭和
十八年三月^{補注二}

- 2、「標準語研究の一年」・吉嶺勉 1と同じ。

- 3、「標準語研究を終りて」・橋口正則・1と同じ。

- 4、「標準語指導の方法」・蓑手重則 「国語通信 第九号」 昭和二十
九年

- 5、「方言と共通語」・宮原英光 「国語通信 第九号」昭和二十九年

- 6、「共通語とその指導」・「国語通信 第八号」昭和二十九年

- 7、「誰でもできる共通語の指導」・暁豊俊・「国語通信 第九号」 昭
和二十九年

- 8、「共通語班記録」・「国語通信 10」昭和三十年

- 9、「方言と標準語」・「国語通信 No.14」昭和三十三年

- 10、「話しことば指導研究会」・「国語通信第二十一号」昭和三十五年

- 11、「わが校の共通語指導の実際」 飯牟礼小・福添喜信・「国語通信 第
二十一号」昭和三十五年

- 12、「学力の向上をめざすことば指導」前之浜小 西元四男 「国語通
信 第二十一号」昭和三十五年

- 13、「大丸校話しことば指導研究会」・「国語通信 第二十五号」昭和三
十七年

- 14、「話しことば指導の実際」大丸小 松元二夫 「国語通信 第二十五
号」昭和三十七年

- 15、「私のはなしことば指導について」田崎小 上谷俊郎 「国語通信

第二十五号」昭和三十三年

- 16、「わたしたちの共通語指導」大根占小 平嶺薫 「国語通信 第二十五号」昭和三十七年
- 17、「アクセント指導に於ける一つの留意点」木之下正雄 「鹿児島国語教育第二号」昭和二十九年
- 18、「私の共通語指導」川畑長生 「鹿児島 国語教育 第二号」昭和二十九年
- 19、「アクセント教育」^{注五}西村義雄 「鹿児島 国語教育 第三号」昭和三十年
- 20、「標準語指導と新教育」上原森芳 「鹿児島 国語教育 第三号」昭和三十年
- 21、「話すこと聞くことにおける目標の分類とその指導」今奈良重則 「鹿児島 国語教育 第三号」昭和三十年
- 22、「聞くことの指導について」横山貞作 「鹿児島 国語教育 第四号」昭和三十一年
- 23、「共通語指導原理」養手重則 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 24、「共通語指導の史的展開」吉嶺勉 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 25、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」床次国治 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 26、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」福添喜信 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 27、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」榎園国郷 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 28、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」山崎馨 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 29、「わたしたちの学校の共通語指導の実際」辛島康男 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 30、「わたしたちの学校の標準語指導の実際」吉松徹 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 31、「アクセントの学習について」仲田寿男 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 32、「アクセント指導の実際」黒木優 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 33、「アクセント指導の実際」上原森芳 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 34、「若い人々のために」西村義雄 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 35、「朗読指導の理論と実際」南郷有徳 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 36、「共通語指導の態勢」米満繁達 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 37、「共通語指導の態勢」山崎馨 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 38、「共通語指導の態勢」浜田益雄 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 39、「わたしの共通語指導の実践」福富哲雄 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 40、「わたしの共通語指導の実践」前野繁 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 41、「共通語指導 特に敬語指導について」有村正照 「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年

- 語教育 第六号」昭和三十三年
- 42、「わたしの共通語指導の実践」西元四男「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 43、「ことばの本の効果的指導」吉村次雄「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 44、「入門期の共通語指導の実践」稲田信子「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 45、「共通語指導の具体的方法」暁豊俊「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 46、「健全な共通語の成長のために」川畑長生「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 47、「鹿児島県国語教育研究会の歩み」南郷有徳「鹿児島 国語教育 第七号」昭和三十四年
- 48、「国語教育の歩み」吉嶺勉「鹿児島 国語教育 第七号」昭和三十四年
- 49、「ラジオ国語教室の利用」北山敏男「鹿児島 国語教育 第十号」昭和三十七年
- 50、「先生に話しかける児童のことばの実態」中尾温雄「鹿児島 国語教育 第十号」昭和三十七年
- 51、「だれでも気軽にできる話しことば指導」西元四男「鹿児島 国語教育 第十三号」昭和三十八年
- 52、「聞く話すの教科書教材の取扱について」丸山真「鹿児島 国語教育 第十四号」昭和三十八年
- 53、「ことばに関する事項の一分野から」肥後久米規「鹿児島 国語教育 第二十二号」昭和四十二年
- 54、「聞き手を意識した話しことばの指導」原崎尚之「鹿児島 国語教育 第二十二号」昭和四十二年
- 55、「聞くこと・話すことの力を充実させるための「ラジオ国語教室」の効果的な指導法の研究」本伸幸「鹿児島 国語教育 第二十二号」昭和四十二年
- 56、「話しことば指導について」荒田薫「鹿児島 国語教育 第二十二号」昭和四十二年
- 57、「話しことば教育史研究——戦時下、鹿児島県のばあい——」野地潤家「鳴門教育大学研究紀要」（教育科学編）第一巻（一九八六）所収
- 58、「共通語と生活語」棕鳩十（言語教育学叢書第一期六巻言語教育の問題点）昭和四十二年文化評論出版 所収
- 59、「ことばの指導」清水美藤次「鹿児島 国語教育 第二号」昭和二十九年
- 60、「共通語のニュアンス」池田隆明「鹿児島 国語教育 第二号」昭和二十九年
- 61、「共通語指導のお膳立てということ」小村秋豊「鹿児島 国語教育 第三号」昭和三十年
- 62、「国語教育と共通語指導」大内山喜三郎「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 63、「共通語指導を顧みて」萩原英則「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 64、「共通語指導を推進する人たち」蓑手重則「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 65、「東京府へ出向ヲ命ス」吉嶺勉「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年
- 66、「話しことば指導を顧みて」浜田光雄「鹿児島 国語教育 第六号」昭和三十三年

六号」昭和三十三年

67、「話しことばの指導について思うこと」竹下降二「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年

68、「愛育時報」桑原静夫「鹿児島国語教育 第六号」昭和三十三年

69、「話しことば指導について思うこと」三浦定雄「鹿児島国語教育 第十一号」昭和三十三年

70、「むずかしい話し言葉の指導」小園春子「鹿児島国語教育 第十一号」昭和三十三年

71、「ことばの感覚を大切に」丸野平一郎「鹿児島・国語教育 第十号」昭和三十三年

72、「話しことば学習の必要性」宮下俊一郎「鹿児島国語教育 第十五号」昭和三十三年

73、「共通語指導」小園実満「鹿児島国語教育 第十九号」昭和四十一年

74、「ことばづかいあれこれ」久米文雄「鹿児島国語教育 第二号」昭和四十一年

75、「話しことばの実態とその指導」黒木優「鹿児島国語教育 第二十二号」昭和四十二年

76、「第八回 鹿児島県話しことば指導研究会」「鹿児島国語教育 第十二号」昭和三十八年

文献解題

鹿児島県の話しことば教育史資料の中で基本的文献と思われる六点について解題をつける。

「二」昭和十七年十月 話言葉改善指導書「鹿児島県話言葉改善委員会 昭和十八年一月

A 同書の目次は次の通りである。

基礎篇

一、音聲

1、発音に就いて

2、アクセントに就いて

3、抑揚と調子とに就いて

4、アクセント辭典に就いて

5、アクセントの矯正指導に就いて

二、ヨミカタ卷一アクセント教程

三、標準語に就いて

四、方言研究と方言矯正

五、鹿児島方言概観

六、學校用語の改善指導篇

序説

第一段 讀本の朗讀

一、發音、アクセント、抑揚、言葉調子の基礎的指導

二、朗讀の範讀、模唱

三、朗讀發表會

四、レコード、ラヂオの利用

第二段 基礎的會話の修練

一、「言葉の時間」の特設

二、基礎的會話の選定

第三段 標準語の全面的日常化

- 一、「言葉の時間」の運用
- 二、少年団組織の活用
- 三、家庭、社会の協力

（二二一P）

B（解題）

昭和十六年四月の学制改革により国語教育が転換し「音声言語」が重視されるようになった。読本とやらんで「ことばのおけいこ」が出版され、教師用書での音声面の解説は詳細であった。昭和十七年二月鹿児島県教育研究会の席上、文部省の長岡督学官は講演の中で「大東亜戦に突入したわが国が戦争遂行上の必要上標準語普及の急務」を強調した。このことは「実は大東亜戦争によって大東亜共栄圏を確立し、同時に日本語を公用語として制定しようという、壮大な言語政策的な意図を含んだ」ものであった。当時の加藤学務部長と山口視学は「はなしことば改善」の運動を推進していった。四十五名からなる「鹿児島県話言葉改善委員会」が組織され、その第一回の会合の時、「アクセントこそ、ことばの指導の背骨である。」との上原森芳氏の言が、「言いまわしだけの指導でよいではないか。」とする説をひっくりかえしてしまっている。昭和十八年十九年における標準語指導のテキストである。後年（特定できない）、八幡小学校から同名の書物が増冊と銘うって出ている。中身はまえがきを簡略にしてある以外同一である。

「二」「標準語指導と新教育」 川尻中学校 昭和二十九年十一月

A 同書の目次は次の通りである。

信は力なり 校長 有田栄助
本校の概要

- 一、校歌
- 二、学校沿革
- 三、学級編成
- 四、週行事表
- 五、職員組織
- 六、卒業生動向
- 七、環境の実態

標準語指導と新教育

- 一、私はこんなにして標準語指導をしてきた
 - 二、標準語指導と新教育
 - 三、標準語指導に対する考察
 - 四、本校における自主協同学習の考察
 - 五、対等対話の指導
 - 六、独話又は目上との対話練習
- 過去の練習資料
- 七、標準語指導と現在の生徒
 - 八、今年度にはいつての歩み
 - 九、ことば指導上の呼吸

○第一学年
○第二学年

○第三学年

B (解題)

「鹿児島県共通語指導の父」とされる上原森芳は戦前から共通語指導にあたっていた。昭和九年成城学園を辞し（家庭の事情——兄の覺市の死去へ昭和九年）によるものと思われる）、帰鹿。別府尋常高等小・出水尋常高等小・開聞尋常高等小・山川尋常高等小・川尻国民学校等を経て昭和二十四年宮脇小で退職。当時は郷里、川尻中の講師として共通語指導にあたっている。

その共通語指導の契機には、成城学園在職当時、父兄参観でアクセント・イントネーション等のおかしさを指摘されたこと・別府小に赴任した時、「鹿児島県の言葉が如何に不自由であり不通であるかを痛感」したことがあげられる。そして、昭和十六・十七・十八年の川尻国民学校での共通語指導は、当時の国策（大東亜栄園における共通語の普及）とも合致し、昭和十六年二月には文部省の長岡督学官の視察とまでなった。昭和二十九年という共通語指導を始めてから二十年を経ている。この二十年間の実践のまとめとも言えるべきものである。

「川尻中学校は六学級であるので、私が一人で国語を担当していたから万事がしやすかった。もちろん学校の職員会生徒会でこれを決議し、国語の時間に朗読調子、発表調子（独話）及びグループによる共同学習の対等対話の指導を一手に引き受けてやった。他の教科のグループ共同学習のし方等も毎週研究会を開いて研究した。こうして学校全体の全教科の学習と音声言語のアクセントを共通語に近づけた。毎朝始業前十五分間全校生徒を校庭に集めて脚本による対話指導をやり、全校の雰囲気を一変し大きな新しい言語の流れをつくった。はじめはおかしがって笑っていたが、だんだん来れて来るにしたがって笑わなくなり、かえって外

来者の方言やそのアクセントを聞いて笑う程になった。この場合職員も生徒と一しょに研修することにし、別に職員の練習を毎朝やったこともあった。それは鹿児島調子と共通語調子との区別、聞き分け、話しわけができる程度のものである。」（「言語指導」上甲幹一・朝倉書店 P 二五一—P 二五二）

「私はこんなにして標準語指導をしてきた」は、「実践国語」（一九五四・第十五卷第一六五号）に掲載されたもので、「標準語指導に対する考察」は昭和二十九年六月に鹿児島県国語教育研究会での発表原稿である。

さて上原森芳は同書の中で、標準語指導の目標を「発音の標準化から校外・家庭の日常生活にまで」としている。また、「芋普通語は美しい標準語や情味豊かなごしまことばを汚し、第二方言を創造し、且つ方言の侵入を容易ならしめ、遂に又もとへ返る。特に生命的談話や理解は困難である。」としている。

「対等対話の指導」では、分団学習の場におけるくだけた常体（タ・ダ体）の話し方について記している。このことについて養手重則は「戦前の鹿児島県の共通語指導では、公的な場のよそ行きの改まったていねい体の話し方の指導のみを意識し、私的な場のふだん着のくだけた常体の話し方の指導は未だ全く意識されなかったのである。これでは鹿児島県の共通語指導は、学校の生活の場から日常生活の場へ拡げようとしても拡げることではできなかったはずである。〈略……引用者〉戦後の民主主義の話し合い学習において、公的な場のよそ行きの改まったていねい体と、私的なふだん着のくだけた常体の話し方とを、全体学習の場と分団学習の場とに振り分けて指導するという方法を発見したことは、実に画期的な発見であったといわなければならぬ。」（「幾山河」P 一一六）と評価している。

「三」 「ことばのほん」 鹿児島県国語教育研究会・鹿児島県教育委員会
昭和三十三年

A 同書の目次は次の通りである。

- 一 おはようございます 二 がっこうへいきましよう 三 よいへんじ 四 なかよし 五 ただいま 六 ろうどく 七 じこしようかい 八 おはなしかい 九 さんすうのじかん 一〇 しゃかいのじかん 一一 こくごのじかん 一二 なぞなぞなかに 一三 ろうかはし 一四 とびばこ 一五 しゅくだい 一六 かしてね 一七 おてつだい 一八 ほんのしょうかい 一九 かいもの 二〇 あんない 二一 おきやくさま 二二 えんそく 二三 あかるいきようしつ 二四 やすみじかん 二五 なわとび 二六 ボールあそび 二七 そうじ 二八 たんじようび 二九 たのしいごはん 三〇 こどもかい 三一 かるたとり 三二 十のとびら 三三 せんせいと 三四 せつぶん 三五 おしらせ 三六 でんわ 三七 ほうもん 三八 おわび 三九 ぎだんかい 付一 ただしいはつおん 付二 いいにくいことば 付三 くちのたいそう 付四 アクセントのかた 付五 アクセントれんしゅう 付六 あやまったことばづかい 付七 ろうどくれんしゅう 牛 汽車 わすれもの おしくらまんじゅう 悪太郎の面 月夜のバス (六〇P)

B (解題)

「国語通信 10」(昭和三十年)において南郷有徳は次のように記している。

「私共が最も必要を感じたものは共通語指導上のテキストがほしいということでありました。この度の研究集会は県下各地から御参集を得ま

して、まことによい機会であると思いますので、共通語指導のテキストを作ることを最も大きな問題として取り上げたいと思います。それには、1、編集の方針 2、単元のきめかた 3、内容の文例 4、指導書の問題 5、使用上の問題等、いろいろの問題があると思いますので、これらのことを中心にして、共通語指導上の諸問題にもふれて行きたいと思ひます。」(研究集会は鹿児島県国語教育研究会の主催で昭和三十年七月二十五日〜七月二十八日まで霧島神宮下蓬泉館で開催された第二回夏季研究集会のこと……引用者注)

昭和三十一年三月末に「ことばのほん——小学校低学年用」(「ことばの本」小学校高学年用)が発刊され、同年六月に前記本をテキストに八幡小(鹿児島市)で共通語指導の研究公開があった。昭和三十三年一月になり「ことばのほん」改訂委員会が組織され、四月に「ことばのほん」の改訂版が出された。その改訂の要点は「全校いっせいに指導する場合やNHKの学校放送のテキストとしての立場、あるいは、校内放送の場合、また『ことばのほん指導書』編集の立場等を考慮の結果、低学年用、高学年用を合して一冊としたこと。従来の三十単元を増して三九単元とし、別に付録として、発音・アクセント・誤ったことばづかい、朗読等の基礎的な資料を豊富にのせた。」(鹿児島 国語教育 第七号)三十一P 昭和三十四年)ということである。

「ことばのほん」をテキストとし、NHK鹿児島放送局では、毎週一回十五分間「ことばのおねえさん」(低学年向)(「ことばのほん」(高学年向)の時間を設けてドリル形式とドラマ形式で放送を行った。

A 同書の目次は次の通りである。

まえがき — 本書の利用のしかた —

前編 話しことば指導の理論

一 話しことば指導原理

二 薩隅方言概説

後編 話しことば指導の実際

一 学級指導の実際

(一) 単元の目標

(二) 単元の展開

- 一 おはようございます 二 がっこうへいきましよう 三 よいへん
- 四 ななかよし 五 ただいま 六 ろうどく 七 じこしようかい
- 八 おはなしかい 九 さんすうのじかん 一〇 しゃかいのじかん
- 一一 こくごのじかん 一二 なぞなぞなあに 一三 ろうかはしずかに 一四 とびばこ 一五 しゅくだい 一六 かしてね 一七 おてつだい 一八 ほんのしようかい 一九 かいもの 二〇 あんない
- 二一 おきやくさま 二二 えんそく 二三 あかるいきようしつ 二四 やすみじかん 二五 なわとび 二六 ボールあそび 二七 そうじ 二八 たんじょうび 二九 たのしいごはん 三〇 こどもかい
- 三一 かるたとり 三二 十のとびら 三三 せんせいと 三四 せつぶん 三五 おしらせ 三六 でんわ 三七 ほうもん 三八 おわび
- 三九 ざだんかい

二 全校指導の実際

三 アクセント指導の実際

B (解題)

「鹿児島 国語教育 第七号」(昭和三十四年 三二P)に次のような記述がある。

『「ことばのほん」の刊行と同時に、現場の教師たちから要望されていたもので、会もその刊行を約束していたものだったが、これまた類書のないもので、まったく困難な仕事であった。大げさな表現であるようだが未踏の山に登るにも似て、まことに蹉跎たる歩みを重ねつつ、企画してからおよそ二年の歳月を経て、三十三年九月ようやく発刊の運びに至った。』

また、「話しことば指導原理」を養手重則が執筆しているが、これは「鹿児島 国語教育第六号」にある同氏の「共通語指導原論」とほぼ同一である。これは「本県における共通語指導の苦闘のプロセスにおいて樹立された指導原理である。」(「鹿児島 国語教育 第七号」(三十P昭和三十四年)と南郷有徳が評価している。「話しことば指導原論」では、まず標準語・共通語の概念定義をした上で、共通語指導・話しことば指導の違いを明らかにしている。そして、方言ゆえにおこる問題点に対する地域の要請について触れ、方言が人間形成上におよぼす影響について記している。話しことば指導の目標・内容・機会・方法・留意点について詳説している。

「薩隅方言概説」では音韻・アクセント・文法について詳説している。

〔五〕「鹿児島 国語教育 第六号 特集 共通語指導」 鹿児島県国語教育研究会 昭和三十三年

A 同書の目次は次の通りである。

巻頭言

共通語指導原理

共通語指導の史的展開

健全な共通語の成長のために

若い人々のために

アクセントの学習について

アクセント指導の実際

アクセント指導の実際

朗読指導の理論と実際

◎共通語指導の実際

わたしたちの学校の共通語指導の実際

わたしたちの学校の共通語指導の実際

わたしたちの学校の共通語指導の実際

わたしたちの学校の共通語指導の実際

わたしたちの学校の共通語指導の実際

わたしたちの学校の標準語指導の実際

◎指導の実際

入門期の共通語指導の実際

わたしの共通語指導の実際

わたしの共通語指導の実際

わたしの共通語指導の実際

◎指導の態勢

蓑手重則

吉嶺 勉

川畑長生

西村義雄

仲田寿男

上原森芳

黒木 優

南郷有徳

山崎 馨

福添喜信

床次国治

辛島康男

榎園国郷

吉松 徹

稲田信子

福富哲雄

西元四男

前野 繁

共通語指導の態勢

共通語指導の態勢

共通語指導の態勢

ことばの本の効果的指導

共通語指導 特に敬語指導について

共通語指導の具体的方法

随想

共通語指導を推進する人たち

話しことばの指導について思うこと

東京府へ出向ヲ命ス

共通語指導を顧みて

愛育時報

国語教育と共通語指導

話しことば指導を顧みて

学びたいもの

本会規約

編集後記

山崎 馨

米満繁達

浜田益雄

吉村次雄

有村正照

暁 豊俊

蓑手重則

竹下降二

吉嶺 勉

萩原英則

桑原静夫

大内山喜三郎

浜田光雄

前野 繁

B (解題)

「鹿児島 国語教育 第六号」は二冊ある。昭和二十八年版と昭和三十三年版である。前者は鹿児島県国語教育研究會発行の「国語教育Ⅲ通Ⅲ信Ⅲ No.5」の続号である。名称の変化は、この年鹿児島で全国国語教育研究協議会・全国大学国語教育学会が開催されたことと関係があろう。「鹿児島 国語教育 第二号」が昭和二十九年に発行されていることから、実質的には「鹿児島 国語教育」の第一号である。したがって、表

題の上からは「鹿児島 国語教育 第一号」は存在しないことに留意しなければなるまい。

さて、本書は後者の三十三年版の方である鹿児島県における共通語指導の最も隆盛をきわめた頃のものである。掲載されている論文・実践記録からたどれる共通語指導者（共通語指導に取り組んだ学校）は次の通りである。山崎馨（徳光小）福添喜信（春山小）床次国治（川上小）辛島康雄（八幡小）榎園国郷（可愛小）吉松徹（川尻中）稲田信子（南方小）福富哲雄（南小）西元四男（前之浜小）山崎宗吉（吉川小）米満達繁（船津小）浜田益雄（玉江小）吉村次雄（奄美小）有村正照（吉利小）暁豊俊（中山小）

〔六〕 「研究 記録」 話しことば指導の歩み 「昭和三十六年度 ことはなし 指導 書」 贈答郡大崎町 大九小学校 昭和三十六年

A 「研究 記録」 話しことば指導の歩み」の目次は次の通りである。

研究の歩み

I 話しことば指導の意義・動機

II 指導の足どり

III 指導の経過

言語調査資料

一、新入児の言語実態調査

（発音傾向・使用状態）

二、児童の共通語使用状態

（全校）

三、言語意識調査

四、地域社会の実態調査

（父・母・兄・姉）

研究事例

わたしのやってきた一年生の話しことば指導 福留千江
学級会活動に話しことば指導がどのように役だってきたか

話しことば指導と特殊児童

二宮ヨシ
松田ウル

話しことば指導と生活指導

西坂客二

公団学習と話しことば指導

松元二夫

話しことばが学習指導にいかに関与するか

横山和幸

「昭和三十六年度 ことはなし 指導書」の目次は次の通りである。

月		題		材	
一		年			
4		5		6	
がっこう	よいへんじ	がっこう	もののなまえ	かずの	よびかた
おうち				あそび	
				おてつだい	
				あそび	ことば (一)
				あそび	ことば (二)
				ことば	
7		6		5	
7		6		5	
4		5		6	
べんきようことば	「まず」「〇〇です」のつかいかた	よいへんじ	たずねるときのことば	朗読	しおひがり
				遊びごむとび	買物ことば
				おてつだい	助詞の使用法
				おつかい	

B (解題)

管見によると、話しことば指導の研究誌として昭和二十年、三十年代の研究の成果を総括したものと位置づけられる。記録からたどれる研究誌では、いちばん最後のものとなる。「話しことば指導の歩み」は昭和三十四年度からの三十九年の研究をまとめたものである。「話しことば指導の意義・動機」を次のようにあげている。① 民主的人間形成のうえに共通語が大きな役割を果たしている。方言は、封建的なことばの影響も強く、しらずしらずのうちに、封建的・閉鎖的な考え方や生活をしていることになる。児童の言語実態から話しことば改善の必要がある。② 児童の「話さない」とか「話せない」ことの原因は、教科書ことば(共通語)と生活ことば(日常使っていることば)が別々であることによる。共通語の生活化がなされることによって、発表力の問題にせよ、学力の問題にせよ、児童会活動の悩みにせよ、解消される面が多い。③ 共通指導は標準的なアクセント感覚を身につけさせなければ、その効果はあげえない。語い指導とアクセント指導を平行して指導することが効果的であるから、この方法をとった。

「指導の実際」では、三十四年度・三十五年度の指導のあり方と反省を記し、「今までの指導を反省し検討した結果『ことばのほん』による指導だけでは児童が日常使っている話しことばの改善はむずかしいので、児童の話しことばの実態を調査し、これに基づいて指導の改善をはかることにした。具体的には学校生活の学習の場・遊びの場・作業の場などで、児童が使っていることばを集録し、それを共通語におきかえて、正しいアクセントやイントネーションなどの記号をつけて指導、場に即した話しことば指導に力を注いだ。」とある。

言語調査資料は、たいへん具体的で綿密なものである。

研究事例は目次にあげたように五教諭がそれぞれの研究のテーマに基

づいて研究したことを記している。まさに全職員で取り組んだことを示すものであろう。

「^{はなし}ことば 指導書」の作成は、「話しことば指導の歩み」によると「話しことば(共通語)の生活化をはかるため、更に教科指導や生活指導に直接役立つ話しことばを重点的に指導するために、児童の実態や地域の言語環境に即して作成したもの」とある。そして、内容的には、「例えば教科面では、国語・算数・社会・理科など教科別に、その教科の指導形態に即した話しことばが指導できるように工夫している。更に自主・自発学習を盛り上げるため、学習形態に応じて、分団学習の場で使われる常体のことば、全体学習の場で使われる敬体のことばなどを取り上げている。生活指導の面、例えば遊びことばの指導においては季節の遊びを調査し、それぞれの遊びのルールや、その遊びで使われていることばを集録して、題材や指導の要項を設定した。」とある。

注一 発行されたことは確かであるが未見である。

注二 「話言葉改善指導書、第二集」としてある文献があるが、これは誤りで、正しくは「^{はなし}話言葉改善指導書」である。

注三 注五の西村義雄氏とは同姓同名の別人で、開聞町川尻にお住まいである。

注四 「鹿児島 国語教育 第六号」は昭和二十八年版と昭和三十三年版があるが、その経緯については解題の「五」に記している。

注五 鹿児島市下荒田一―二九―六にお住まいで、「鹿児島 国語教育」誌上に再三にわたり、その論文が掲載されているのは、こちらの方である。

注六 史実に則った論考である。これに対し「鹿児島 国語教育 第三十一号」の「鹿児島 国語教育史」は注四に示した点で不正確である。

補注一 第五巻第三号は昭和十年と昭和十八年の二回発行されている。前者は文学社、後者は国語研究所の発行になっている。

補注二 「吉嶺勉先生遺稿集」の二二二Pでは「コトバ」の四月号に反省録を書

いた」とあるが、これは三月号の誤まりである。

II

標準語教育てん末記

宮崎県日南市(元大崎中学校長) 川 畑 長 生

一、戦前における標準語教育について

昭和十九年四月、話し言葉研究生として一年七ヶ月の東京での研修を終えて帰県した私は曾於郡末吉町末吉小学校に着任した。私に与えられた任務は末吉小の一訓導として勤務のかたわら、当時の県教育の目標であった標準語教育を推進するために郡内の小学校を巡回して指導助言して標準語教育の徹底を図ることであった。

鹿児島県当局が標準語教育の研究のために現職の教員を東京に派遣したのは、昭和十七年四月が始めてである。この時に派遣されたのは吉嶺勉先生等十余名であるが、この一回生に続いて同年十一月に更に二名が追加派遣されたのであるが、そのうちの一人が私である。翌年四月には二回生が派遣されたが、私たち二名は二回生と合流して研究することとなった。県当局が標準語研究生として東京に派遣したのは二回生までで、このあとは派遣は打ち切られたのである。

さて、研究生たちは鹿児島県から東京市(当時は市)へ出向という辞令だったので、東京市内の小学校に分散して勤務するかたわら標準語の研究することになっていた。昭和十七年十一月、東京市に出向した私は荒川区の第三荒川小学校に勤務することになった。こ

の学校は高等科の生徒(現在の中学一、二年生)だけで生徒数約八百名だった。当時の荒川区は小工場の密集地帯で優秀な生徒もおらず進学する生徒もいなかったので授業は楽であった。研究派遣生の派遣期間は一年で一年たつと再び鹿児島県へ出向となり、派遣前の市郡の小学校に帰って標準語教育の指導に当ることになっていた。私は前述のように年度途中で派遣されたために一年七ヶ月の長期派遣となり二回生とともに帰県した。研究生には県から研究補助費として毎月十五円が支給されたが、東京は物価が高くて研究生の生活は楽ではなかった。私は最初は単身上京して下宿しながらアパートを探して昭和十八年一月、妻と子供を同伴して板橋区の上板橋の六畳一間のアパートに住むことになったが、生活は辛い分苦しくて郷里の父から補助を受けたり妻の質屋通いも欠かせぬ状態であった。

ところで研究生たちの標準語の研究について述べてみると、研究生は毎週一回、東京高等師範学校に集まって県から依頼されていた小林智賀平教授から標準語教育の基礎となる音声学や言語学等の講義を受講した。東京アクセントの型やイントネーション、発声機関の構造、発音の科学的分析など先生の講義は懇切丁寧そのもので、どこから研究に手をつけてよいか皆目見当のつかなかった私にとって救いの神であった。先生の講義を記したノートは今も大切に保存しているが、小林先生こそは本県の標準語教育を推進した影の恩人であると思っている。そのほかに毎週金曜日の夜NHKの東京放送局で小学校の教師を対象に開かれていた朗読研究会に欠かさず出席した。指導者としては標準語アクセント辞典の著者で東京文理科大学の教授であった神保格先生や文部省の松田先生、NHKの一流アナウンサーが出席されていた。会員は東京市をはじめ神奈川県、千葉県、埼玉県など東京近辺の小学校教師で、児童劇や紙芝居その他

児童演劇関係の研究者と国語教育関係の人たちが主で、毎回三十名から四十名ぐらいが集まって熱心に研修していた。教材は主として小学校の国語読本の朗読の研究であったが、神保先生の指示に従っていつも模範朗読をするNHKの女性アナウンサーの美しい朗読には、ただうっとり聴きいるばかりだった。会員にも指名して朗読させられたがさすがにうまい人が多かった。会員の中には秋田県から研究に来ている人もいると聞いたが、当時秋田県でも標準語教育研究のために東京に教師を派遣していたようである。この朗読研究会は東京アクセントを習得するために非常になつたので、研究生たちはこの会にはほとんど欠かさずに出席していた。

また、研究生一同が県出身の校長さんのいる広尾国民学校を訪問して参観したり、時には研究生同志で授業を見せあったりする機会もあったが、あとはそれぞれの個人研修であった。東京ではよく標準語に関係のある音声学とか言語学等の研究会が若手の学者たちによって開かれていたので、お互いに連絡をとりあって機会あるごとにできるだけ出会って聴講した。夏休みには東京文理科大学で教育者の夏季音声学講習会なども開かれたので研究生一同そろって受講した。

昭和十八年四月から私は日本大学の夜間部の国漢科に入学して標準語だけでなく国語教育全般について研究を深めることにした。学校の勤務が終ると一時間近くも電車でゆられて三崎町の日本大学まで出かけて授業を受けて、授業が終るとまた電車でゆられて一時間三十分かかって上板橋のアパートに帰るのはいつも十二時前後であった。当時私のいた上板橋のアパートから荒川の勤務校まで行くのには郊外電車と市内電車を三回乗りかえて行かねばならないので二時間近くかかった。従って毎朝出勤するのに六時には家を出ない

と遅刻するので教材研究も読書もテストの採点まで殆んど電車の中でやった。日曜日は一週間分の標準語のノートと日大の講義のノート等の整理で明け暮れて外出どころではなかった。東京に一年半も住んでいながら浅草や銀座など行つたこともなく、妻や子供と東京見物などしたことは一度もなかった。今考えるとよくまあ、あんな重労働ができたものだと思ふに思ふほどだが、三十歳前後の若さとなんとかして標準語教育の指導者として恥かしくない実力をつけて帰県しようという使命感に燃えていたためであろう。このような生活が一年半近く続いたのである。

第三荒川国民学校は私にとってはいわば標準語研究のための足場みたいなもので（はなはだ申し訳ないと思うのだが）私の心は常に標準語研究に向いていたので同校での思い出はあまりない。担任した生徒の印象すらもはっきりしないが、ただひとつ忘れられない思い出がある。私の校務分掌が公文書の係りだった関係上、同僚の先生方が公文書を見ては自分に必要なものを公文書綴りからはずして返却しないことがままあったので、いささかしゃくにさわつてある日の職員朝会で少しばかり語調を強めて「公文の整理上困りますので用がすんだらもと通りに公文書綴りにくさつておいてください。」と言った。ところが私の発言が終るとあちこちで笑い声が上がったので不思議に思いながらポカンとして立っている、隣席の沖繩出身の教師が「川畑さん、それはくさつてじゃなく綴じてと言うのだよ。」とそつと教えてくれたので、やっと笑い声の意味がわかったのであるが、まことに赤面の至りであった。この時以来、職員会で発言するときには慎重になったことは勿論であるが、方言とはこのように根強いものである。

昭和十九年三月末、一年七ヶ月に及ぶ東京での標準語の研修を

終つて再び鹿児島県に帰任した私は、曾於郡の末吉小学校に勤務することになったが、まず自分の学校の標準語教育をはじめると共に郡内の小学校に対して標準語教育の伝達講習をすることになった。学校からの要請に応じて学校訪問をしてアクセントの解説や朗読の指導をしたり実演授業をして教師の指導力を高めることに努力した。また学年末には郡視学の命によって郡内の町村別に抽出校の標準語教育の実態査察に行ったりした。ある小学校の査察に行った時のことであるが、戦時中のこととて私を迎えて校庭に整列した全校児童の前で朝礼台の上に立たされて、「かしらなか。」の敬礼を受けることになってとまどつたこともあつたりした。県当局の標準語教育に対する熱意は相当なもので、これを反映して各学校現場では校長以下全職員が標準語の徹底に全力をあげて努力している様は異状とも思われるほどであつた。校内では方言の使用は禁止され、うっかりして方言を使用すれば方言と朱書したハガキ大のボール紙を下校するまで首にかけていなければならないとかいうように、なんらかの罰を受けるといふきびしさであつた。県当局の熱意と学校現場の努力によつて県下における標準語教育に対する関心は異常な高まりを見せたが、子供たちが校内で使用している言葉は皮肉にも標準語とはだいぶちがつて、鹿児島方言と標準語をチャンポンにしたものとなり、子供たちが一生懸命話しているのを聞いて思わず苦笑することがたびたびあつた。これは指導に当る教師自身が標準語に対する十分な知識も技術もないままに指導をはじめたのであるから無理からぬことであつたといえる。

そうこうするうちに戦局は益々不利になり、昭和二十年になるともう授業どころではなくて、教師は生徒を引卒して出征軍人の留守家庭に農作業の手伝いに行つたり、原野や荒れ地を開墾したり防空

壕づくりが日課になつてきた。こうなるともう標準語どころではなくなりやがて八月十五日の終戦とともに標準語教育も終止符をうつたのである。

二、戦後における話し言葉指導

終戦の翌年の昭和二十一年四月、私は岩北国民学校の教頭を命ぜられて転動した。若冠三十二歳であつた。昭和二十一年は敗戦によって希望を失つた国民が、ようやく虚脱感を脱して自力で立ちあがろうとする気持が芽ばえはじめた頃である。だが国民をとりまく四囲の現実はいきびしく、永年の戦争によつて疲れ果てた国民、荒れ果てた国土、食糧や衣料の極度の不足は言語に絶するものがあつた。だが新日本創造の原動力として教育は一日もゆるがせにできなかった。新しい教科書ができるまでの間は戦前の教科書を使用した。進駐軍の命によつて文章のあちこちを黒い墨で抹消されたつぎはぎだらけの教科書を手に、民主々義の何たるかもはつきりつかめないままに授業は続けられた。特に力を入れたのは、民主々義は言論の自由からということと討論学習が盛んにとり入れられた。討論の訓練のためには学級を二分して、片方を馬とし片方を牛ときめて自分の長所を主張するとともに相手方の欠点を指摘してやりこめあうという、今から考えると笑い話のようなことを大まじめで毎日のようにやつた。このようにして討論学習を続けているうちにわかつたのは、子供たちが標準語が自由に話せないために発表に抵抗を感じて、討論がより上らないということであつた。自分の思っていることを人の前で自由に発表するには、発表の手段である言葉が自由に使えなくてはならない。討論を活発にするためには標準語の教育を復活する必要があるという結論に達して、学校全体として再び標準語教育にとりくむことになつたのである。

昭和二十二年四月、岩北国民学校は岩北小学校と改称された。岩北小の標準語教育はこの年から本格的に始められたが、終戦前の標準語教育の弊を避けるために職員研修を重視して教師の指導力を高めるよう努力した。週一回の職員研修ではアクセントを中心とする音声面と語い語法の研修と朗読の指導に重点をおいた。毎朝の職員朝会時に五分間を特設してその週の指導教材である学習用語との生活用語のプリントの練習を実施した。児童の面では全校朝会時に学習用語や生活用語の全体指導や学年指導を行ない学級代表による読本の朗読や簡単な会話劇などとり入れて学校全体の雰囲気づくりを努めた。

当時の終戦後もひき続いて標準語教育を実施しているところは、本県標準語教育の発祥の地である揖宿郡の徳光小学校と岩北小学校の二校だけだった。岩北小が職員旅行を兼ねて徳光小を訪問して授業参観や標準語教育について意見交換をしたのがきっかけになり、両校は交流を続けて励ましあった。

その頃、岩北小の屋根瓦の修理に数名の瓦職人が都城から来て仕事をしていたが、ある日の昼食時に一人の職人が話しかけて、「先生、この学校には引揚者の子供が多いですね。」と言ったので、「どうしてですか。」ときくと、「子供たちの話すのを屋根の上で聞いていると引揚者の子供が多いようなので。」ということであった。岩北小の標準語教育は引揚者とまちがえるほどアクセントまで徹底したのである。

岩北小に六ヶ年勤務した後、私は郡内の志布志小学校に転動した。ここは県内でも有数の大規模校だったので学校全体としての標準語教育はあきらめて、自分の担任学級だけにしぼって指導することにした。転動後二年目に希望して一年生を担任して入学当初から徹底

して言葉指導をはじめた。この学級には今までの経験を生かして音声面を重視して指導した結果、予期以上の成果をあげることができた。この学級は研究を継続するために二年生まで続けて担任したが、二年生の二学期になって子供たち同志の会話や読本の朗読などをテープに収めて上京し東京の子供たちと比較してみることにした。上京した私は知人の杉並第三小学校長の吉田瑞穂先生の学校を訪問して国語部の先生方にテープを開いてもらい二年生の朗読と比べてみたりした。結果は私の予期したとおりで満足することができた。特に忘れられないのは二年生の三学期に曾於国語同好会の主催で志布志で国語教育の講演会を開いた時のことである。講師としてお招きした東京都の小学校長の上飯坂好美先生に私の学級の国語の実演授業をして頂いたのであるが、子供たちも活発に応答してみごとな授業が展開された。授業が終わってから上飯坂先生が私の肩をたたいて、「今日の授業はとても楽しかった。私の学校で授業する時よりも子供たちが活動してやりやすかった。」とほめて頂いたが、この時私は今までの標準語教育の苦勞がやっと報われた思いがして、目頭があつくなつたのを覚えていた。

昭和二十八年の夏休みの八月中旬に県国語教育研究会の第一回の夏季宿泊研修が始良郡の塩浸温泉で行われた。会長の鹿児島大学教授の蓑手先生から出会して標準語教育について発表するようにとのことで私も出会した。当時の塩浸温泉は佳例川駅から七、八キロの山道を歩いて行くほどの山の中の閑静なひなびた温泉郷で、蓑手会長を中心に二十数名の会員が温泉旅館に宿泊して、溪流のせせらぎと蟬しぐれの中で二泊三日の研修を楽しんだのである。この時に私は標準語教育の理論と実践について発表をして、アクセントの実技指導等も行つたのであるが、他県の実例として秋田県の標準語教育

の状況にふれて、秋田県国語教育研究会で発行している「ことばの本」を紹介して、本県でもテキストを作って標準語教育を復活する必要性を強調した。この宿泊研修での私の発表を契機にして標準語教育の必要性が再認識されて、標準語教育を「話しことば指導」と名称を変えて県国語教育研究会の手によって「ことばの本」や「ことばの本指導書」が作製発行され、再び学校現場に日の目を見ることになった。

さて、県国語教育研究会の提唱によって「話し言葉指導」の必要性が再認識された結果、「話し言葉指導」を学校教育の課題としてとりあげて、研究と実践にとりくむ学校が県下のあちこちに見られるようになり、県国語教育研究会と共催で研究公開をする学校も出てきたが、県下全体から見るとその数は微々たるものであった。県国語教育研究会が「作文指導」とともに「話し言葉」を重点目標に掲げて積極的に推進したにもかかわらず全県的な盛り上がりを見るに至らなかったのは、根強い鹿児島方言の土壌に共通語を導入することの困難さと、これに打ち勝つだけの指導力をもった指導者の不足が最大の原因だと思う。

その後、テレビが一般家庭に広く普及して共通語が茶の間に氾濫するようになり、学校教育にも大中ミヤに視聴覚教育がとり入れられてもはや共通語は耳を通して子供たちの身近かな言葉となり、もはや学校で「話し言葉指導」を特設する必要はなくなったのである。

（解題）

戦前の（昭和十七・十八・十九年）話しことば教育史をとり上げた論考は三点ある。

「共通語指導の史的展開」（吉嶺勉「吉嶺勉先生遺稿集」昭和五十七年 所

収）

「学校における方言と共通語 2 九州南部——鹿児島を中心に——
養手重則」（「方言学講座」第四巻 東京堂 昭和三十六年）

「話しことば教育史研究——戦時下、鹿児島県のばあい——」（野地潤家「鳴門教育大学研究紀要」第一巻 所収）

しかしながら後ろの二点は少なくとも昭和十七・十八・十九年の間の話しことば教育史における歴史的事実の記述は「共通語指導の史的展開」の域を出ない。この三年間における、新たな歴史的事実を提出している文献である。しかも終戦後の「標準語教育」の具体的な事例と「ことばのほん」「ことばの本指導書」の成立事情の一端を記述しており、本県における話しことば指導の推移がよくわかる。

筆者、川畑長生氏は大正三年三月生まれで昭和十年鹿児島師範学校本科卒業後、同年肝属郡境尋常高等小学校をふり出しに、昭和四十八年大崎中学校長を退職するまで三十八年もの間国語教育に尽力された方である。昭和三十六年大崎町大丸小の話しことば研究に深くかわった方である。現在、日南市星倉四〇一七の一七（〒八八九—二五）にお住まいである。昭和十七・十八年の現場教師の東京派遣生の中で確かな話を聞ける方は少ないが、その中のお一人である。

昭和五十四年大崎町教育長を退職後、依頼を受けて本論考を執筆、送付（鹿児島 国語教育）誌と思われる……本人談）したが活字化し印刷したものが、ご本人に届かなかった由。この度の調査で原稿の草稿が出てきたので、前出誌に掲載されていないのを確認しご本人の了解を得て全文を掲載した。

注一 同論文の初出は「鹿児島 国語教育 第六号」（昭和三十三年）である。

外に「国語教育の歩み」(同氏「鹿児島 国語教育」第七号 所収)「東京府へ出向ヲ命ス」(同氏「鹿児島 国語教育 第六号」所収)があるが歴史的事実の記述は「共通語指導の史的展開」の域を出ないものである。

III

川尻部落総蹶起ことば改善運動!!

一、趣旨

終戦後日本は、個人の尊厳を認める民主国家となりましたが、その後十年未だにその実は上つてはいません。その原因の一つは人間上下の差別を立てていた封建時代の上から下への人格をふみにじった言葉が依然として残されているからであります。わが川尻においてもまさにその通りで、女や、子供が人間的なことばあつかいを受けているでしょうか。とくに親が子供に対することばづかいは全く聞くにたえない戦国時代やそれ以前のことが今日民主日本、平和日本の川尻に平然として使われています。そのことが及ぼす悪いえいきょうは、実に人生の善美なるもの、福德一切のものを根こそぎにするものであることは、日常川尻にそのなま／＼しい事実を目に耳にしているのであります。ここに深く思いをいたし、われら部落民すべてがけつ然と立ち上がり、方言のうち有害無益なものを徹底的に浄化し、わが川尻の文化の程度を高め、明かるい、和やかな、住みよい部落にしたいと思ひます。みなさんの御賛同と御協力とをひとえに願ひします。

昭和二十九年六月十八日

共 催 開聞村役場川尻出張所

新名主 鹿児島県話しことば教育史資料および文献解題

二、こんな言葉はやめましょう。

○おつとがつまに(うな、わや、うんが、わいが、いんげさ)
○つまがおつとに(わがは、人ばつかい、きしかやいが、わがてなきつせんじおつて)

○親が子に——とくに母が子に「わや、うな、わいが、うんが、ばかが、こんやつが、あんやつが、こんもんな、ばつかぶいが、ばくつが、ばくつごろ、そでつぶい、おちやつもん、おぼつもん、こしきもん、なまくらが、ぬすともん、ばつさぶい、ばがふともん、うんがえなもんなでつくらめ、ごんごつ、さばさばつ、きときとつ、きつせんか、きしくろわんか、ぎばつかいきしかやすが、ふてこずぬげつ、おらきしたん、めしばつかいどしことんのくろつ、はつとくれが、しごじやきつせんじおつて)

△ただっころいどね、ふんころいど、びりつ、つまんころいど、にじっころいど、ちっころいど、はいころいど、ぐりつに、ぎつぎつど、てをつまんきつど、あすうんまぐつど、きいころいど、てをただつきつど、あしのすねをひとうじうつごつどね、けいおつど、つけいだとぎやごんごつもどつくど、いっとほをせんじ、じはおばえんじ、じごじやとんじやがのし、あばるいこつばつかいきしあばれつ、がつつい、げんせん、こんもんな、うっこれつでんたつしらんちゅえば、

川尻評議員会

川尻婦人会

川尻青年会

川尻消防団

川尻PTA

川尻小中学校

まわがたつもきつみつくれ、こげなめずらしもんちゆが、よんなげ、おいもんじやろが、わがたじや、げつせーん、あいよころよ、しんきがにゅつだー。

△きゆは、こんにや、まだじやいもした。（こんにちは、こんばんは）

△まあ いんまじやいもそ（さようなら）

△ごやつげさまじやいもした。（おせわになりました。ありがとうございます。）

○まんによんもい（上原森芳）

まんぞもい（下川盛之助）

まんによんかぐ（上原覺市）

一ちよんかく（中川覚一）

その外のあだな。

○大人も五つ六つの子供もへその下のことをいわないようにしましう。

○このほかにもまだくたくさんあろうと思いますが、川尻だけならんぼうな、けいべつしたことばではないでしょうか。

右のようなことばをつかっているかていはたのしいでしょうか。子供はかわいそうです。こどもはますくらんぼうな心になり、あばれものになり、人のいうことをきかない、おうちゃくなにんげんになります。

○「乱臣賊子はことばをつつしまざるよりおこる」北畠親房

こどもはおやのことばや、ともだちのことばどおりになり、またそんなことばどおりのにんげんになります。

三、こんなに言ったらどうでしょう。

○夫が妻に（おいはる子。お母さん。おまえはどう思ふかね。）

○妻が夫に（ちよつとあなた。お父さん。「おまんさあ」）

○親が子に（けんちゃん、きてごらん、あめをあげるから。よしおさん おつかいにいってちようだい。たばこをかってきかない。みず

をくんできて下さい。くんできてくれないか。くれよ。フミ子。おまえはおにわのそうじをしないさい。よしあき、おまえはアマドをあけましたか。早くあけなさい。はやくあらいなさい。さつさとしなさい。お使いにいつておいで。みずをくんでおいで。さつさとかえってくるんですよ。はやかたこと。おりこうさんね。ありがとう。ごころうさんでしたね。今まで何をしていたの？ ゆうがたになつたらはやくかえってくるもんですよ。手も足もあらつておあがりなさい。ホトケさまにおれいをしてごはんおあがり。「こんばんは」いただきます」っていうものよ。

○おまえはまたほうげんをつかったよ。そんならんぼうなことばはつかつちやだめよ。そんなきたないこというのはおよし。けんかなんかするもんじやないのよ。およしなさい。人がどんないじわるをいっても、しても、きばつてゆるしてやりなさい。それがほんとうにつよい子なんですよ。ごかいさんさまのようにね。

○まだくたくさんありましようが、みぎのようなことばづかいになつたら、そのかていはどんなに平和で、文化できで、こうふくでしようか。かていがなかよくわらいにみたされることでしょう。

○「笑うかどにはふくきたる。」これはほんとうです。

○なかよくなるのもことばから、けんかになるのも口がもと。

○人生の幸不幸もことばしだい。

○ことばは文化の母なり。

○川尻の文化と平和とこうふくはまずく言葉から。

○夫婦の間でも親が子にむかつて、めいれいてきなことばより、そうだんするように、きぼうてきに、おねがいするるように、たのむように言つたほうが気もちよく、そうする気になるようです。

○近所となり、きこえるような大ごえで子供をしからないようにしま

しょう。

○子もりのおじいさん、おばあさんにも、よくわからして下さい。

○みなさん一人のこらず力を合わせて新川尻をつくりましょう。

(解題)

この運動については現在のところ資料としての文献が「日本の方言」の
一一九P～一二二Pだけである。運動のプロモーターは当時川尻中の講
師であつた上原森芳であるが、どれ位の期間、どんな運動をして、どん
な成果があがつたのか、どんな問題点があつたかなどは今後の調査が必
要である。

出典は「共通語指導の実際」(川尻小学校・昭和三十二年・十六P)で
ある。もともとは一枚のビラに印刷されたものである。